

国立国会図書館にある

## 緒方洪庵のてがみ

緒方富雄

### 一

「上野図書館紀要」第一冊（昭和二十九年四月）に「富士川游博士旧蔵 幕末蘭方医手簡」という題で、小林花子さんが解説された書簡二十二点が載っている。この資料は昭和二十七年六月に富士川孝雄氏が寄贈されたもので、総計二十五点あるという。

その「一五」に緒方洪庵（一八一〇—一六三）のてがみがある。あて名は「高雅兄」とある。これは富士川游先生が所蔵であったとき雑誌に発表されている。わたしも写真複写をつくっていた。わたし「緒方洪庵伝」（岩

波書店 初版昭和十七年 第二版昭和三十八年）にも引用した。ところがこのてがみが国立国会図書館に入ったことは、不注意にも知らなかった。このたび必要があつて複写をおねがひしたところ、これについて書くようにというおすすめをうけたので、お受けした。

まず「紀要」に載っている解説を、原文について補訂してかかげる。なお参考のため、紀要の解説の正誤表を最後にかかげておく。

先頃は御細書被下辱拜見。此節春色逐日相加り候へとも免角不整之氣候に御座候。御全家愈御清寧可被

成御揃奉賀候。隨而草堂長少無異、依旧送光罷在候条、乍憚御降念可被下候、たんざく之事御申越に付、早々垣与へ申付漸々昨日持参いたし候に付、舟便差出申候。御入手可被下候。松尾屋行御状早々相届候処、先方より御迎之人遣し候とか申出申候。昨年御遣し之書状先方へ相達し不申とか、手元にて滞り候事は無之様相覚申候。如何之間違歟。尤も多用にて失念いたし候事有之歟も難計、併し手元には滞り居不申候。左様御承知可被下候。海防策之御説至極御尤に奉存候。可相成は拜見いたし度、御序に御草稿御差登し被下度奉希候。實に此節柄天下之御一大事二百余年之恩沢に浴しナガラウカ〜と寢食を安シ居候時節には無之、身分相応之忠節は尽し度キ事に有之候へ共、蛆虫シラカバ同然之身分、何をいたし候ても更に省ル人も有之間敷、唯慷慨而已日を暮し候事なり。併し野生か如き遊民空ク遊民にて過し候事恐多ク存當時は病用相省キ専ラ書生教導いたし、当今必用之西洋学者を育立候積に覚悟し、先ツ是レヲ任といたし居申候。微忠御憐察可被下候。扱浦賀も存外平穩ナル事にて和議相調ひ、交易は五年御延引、石炭置場ハ彼レカ急務と申事にて豆州下田港御渡しに相成候とか申ス街説に御座候。扱々不思寄次第虚説か実説か相分り不申候。又々近日にオロシヤも浦賀へ参

り可申、其覚悟可致様諸家様へ御達し有之候とも申候。加様之形勢に相成候而は引続キ英夷も仏夷も来ル様に可相成、其内内地不測之変も可難斗と案じ過しては、實に夜も寝ラレカネ候事に御座候。何卒國威不陥様にと天地ヲ禱ル而已に御坐候

賤か家にもらさぬ雨アメももるまてに

母屋の棟木は何朽にけん

一清朝殆亡て北京落城と申風評御坐候。是も虚実不相分、何分彼地も大變と被察申候。之レカ爲昨夏来唐船不参、葉種高価、医者は大困に御座候。尚可申述事も多く、不堪感慨事共も有之候へ共、先つ今便は闊筆いたし候。万々期後便候。尤モ此書状御覽後御火中可被下候。御答まで。草々頓首

三月十二日夜半

高雅兄

洪 庵

尚々光政北堂様始々御両家皆様へ可然宜ク

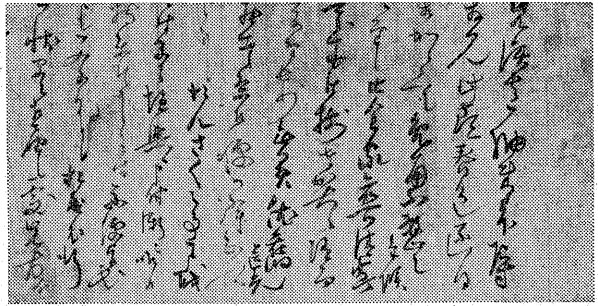
御致声奉頼候。以上

夜中睡眠相認御分りかね候と奉存候。

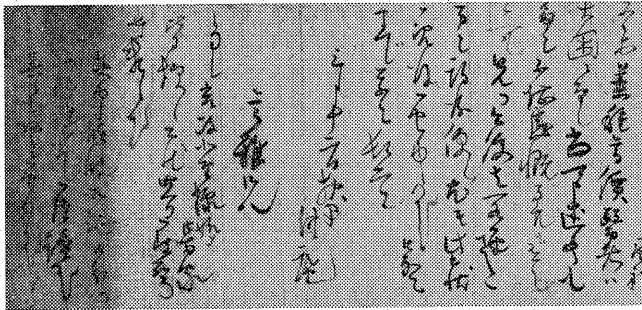
御推説可被下候。呉々もあと御火中可被下候。

## 二

あて名の「高雅兄」は、大藤高雅(たかつね)のこと、



尾  
↓



↑首

洪庵の姉の子、すなわち甥である。洪庵は足守藩士佐伯瀬左衛門惟因とキャウのあいだにうまれた末の子である。おさなくて死んだ男の子をのぞいて、一番うえが姉キチ、つぎが馬之助(右馬之助、のち惟正)、そして洪庵が末である。洪庵ははじめ田上驛之助といったが、のち緒方三平、そしてのち洪庵とあらためた。

この姉キチは吉備津宮の社家(神官)堀家徳政(ほりけのりまさ)にとつぎ、二人の男子をうんだ。長男が輔政(すけまさ)、二男が高雅である。幼名を光治郎といった。吉備津宮の神事をつかさどる家(社家)には、堀家氏のほかに藤井氏がある。筆頭の社家(社家頭)の一つで、代々学識の高い人が出た。なかでも藤井高尚(たかなお)(一七六四—一八四〇)は寛政五年(一七九三)から本居宣長(一七三〇—一八〇一)に学んで国学に深く、宣長門下もとくにぬきんでいたという。また和歌にもすぐれ、多くの歌をのこしている。高尚については「藤井高尚伝」(吉備津神社編 昭和十五年十二月)にくわしい。

高尚は文化十一年(一八一四)のころ隠居し、その子高豊(一七九一—一八二五)がついだが、父にさきだつて、妻美弥と娘松野をのこして没した。それで、高尚は将来この松野の夫となるべき人として堀家氏から、当時七歳の光治郎を迎えて養孫とした。それがのち高雅になる。

高雅は文政二年三月十五日(一八一九)に生まれ、幼名

が光治郎、藤井家に入ってから、高起、高枝などの名があり、嘉永元年（一八四八）ごろから大藤高雅となった。祖父高尚が没した天保十一年八月（一八四〇）には高雅はまだ二十歳そこそこであった。祖父がひきいていた松屋社中は大きいおとろえたが、高雅は学問があり、豪胆な人であったので、よく松屋の学問をささえたということである。

「藤井高尚伝」によると、吉備津宮は徳川時代には幕府から神領として備中国賀陽那宮内村のうち百六十石を御朱印地として寄進されており、社家頭の五家は家格が高く、なかなか力があつたようである。藤井家の人たちは高尚の父高久のときから代々従五位下に叙せられ、高久は但馬守、高尚は長門守、高豊は但馬守、高雅は下総守に任ぜられている。高雅が下総守になったのは弘化二年八月（一八四五）である。高雅は神宮の仕事のワクのなかにとどまることなく、国学・和歌のことはもとよりひろく社会に関心を持つようになり、琵琶湖と鴨川との間に運河を掘りぬく計画をたて、かなりな程度まで具体化したそうである。のちには国事に奔走するようになり、海防策の実現について、幕府の許可を得たことから、一部の反発をうけ、文久三年七月二十五日京都で浪士に暗殺された。四十五歳であった。高雅には妻松野とのあいだに紀一郎があつた。父の神職をついだが、明治十四、五年ごろ行方をくらました。異母弟に卓（大森氏）、甲造（三宅氏）がある。甲造の子が

三宅正太郎氏である。

このように、藤井家をはじめ堀家も、吉備津神等の宮司であるとともに、国学・和歌にすぐれた人物が多く出ており、しかも洪庵とは、その堀家氏にとついだ姉キチや、その子高雅が藤井家に入るなど、血のつながる人がいるので、藤井氏の松屋の学風、ことに和歌の道の気分に多分に接していたことは想像にかたくない。ちなみに洪庵の大阪での和歌の先生は萩原広道（一八一三—一六三）である。大隈玄道にも指導をうけた時代がある。

### 三

さて、このてがみの書かれた年代は嘉永七年（一八五四）である。てがみの後半に「浦賀も存外平穩なる事にて和議相調ひ、交易は五年御延引、石炭置場は彼れが急務と申事にて豆州下田港御渡しに相成候とか申す街説に御座候」とあることから、それが嘉永七年三月三日のペリーとの、いわゆる日米和親条約（神奈川条約）をさしていることはあきらかである。それを三月十二日付のてがみに書いているのは、その情報が意外にはやく大阪にとどいたことを示している。洪庵は「街説に御座候」と書いているが、大阪西奉行所あたりでできたかもしれない。現に昨年六月三日ペリーが浦賀へ入港したという情を洪庵は六月十日西奉行所で書いたと日記に書いている。情報はそれよりはやくとどい

ていたにちがいない。今年も三月十日よりまえにきこえてきたであろう。この年洪庵は四十五歳、高雅は三十六歳である。

#### 四

てがみの冒頭に「先頃は御細書被下」とあるから、返書である。高雅は洪庵へいろいろのことを書いてきたようであるが、「細書」の主体は、洪庵が「海防策之御説至極御尤に奉存候」と書いている「海防策」であろう。このことはあとで触れる。

用事の第一は「たんざく」のことである。高雅からの依頼で、垣与という店に注文しておいたのが昨日とどいたから、舟便で送ったと知らせている。

つぎに、松屋老ゆきの高雅のてがみをとどけたことが出てくる。迎えの人を出すと申出ているというのは、高雅が大坂へ出てくることでも書いてあったのか。そのあと、昨年松屋あての高雅のてがみを洪庵を通じてとどけてもらったところ、それがついていないという。洪庵は自分のところまでとどいていないと書いている。

#### 五

このてがみのなかで一番重要な部分は、洪庵が天下の情勢を批判し、自分の決意をうちあけているところである

う。洪庵はこの神奈川条約によってもたらされる対外・国内の情勢を「天下の御一大事」と見て、自分もうかうかしていられないので、分相応の「忠節」はつくしたいが、蛆虫（うじむし）同然の身分ではなにをしてもかえりみる人もないので、ただただ慷慨している。ただし、いまでは病用をはぶいて、もっぱら「当分必用の西洋学者」をそたてるつもりで専念していると、決意のほどを示している。内外の形勢を考えて、そのうち国内で不測の変が起るかもしれないとおもうと、夜も寝られないとまで思いつめた気持ちをのべている。

洪庵がこのようなつきつめた心境をさらけ出して書いたのは、高雅が海防策のことなどを書いて、天下国家を憂えてよこしたのに触発されたのちがいない。それにしても洪庵にもまたその心があつたからこそ、このようなてがみになつたのであろう。

洪庵はそのあとで、清朝がほとんどほろび、北京落城という変革の影響で、昨年夏以来中国から船が来なくなり、その結果薬種が高値になって医者がこまっていると書いている。そのころの医者は、このようなかたちで国外の情勢を身近に体験していたのであろう。

#### 六

気心の知れた高雅のてがみにひきずられて、ついつい本

心を書いてしまったが、もとより他人に見せるべきものではない。あとにのこってもこまる。そう考えて、「火中」にと二度も書いたのに、火中にはいらずに現存しているというわけである。

七

おわりに「尚々光政北堂始め御両家皆様」によるしくとある。いくつかある堀家家は、その始祖の名でよびわけていて、光政北堂は光政家の徳政にとついで、いまは未亡人になった姉キチをさすのであろう。「両家」は高雅の実家の堀家家（光政）と養家の藤井家とをさしているのである。

八

このてがみは、大藤高雅という洪庵の甥のてがみへの返書で、嘉永七年三月ごろの国の内外の情勢と洪庵の環境と心境とを物語る重要な資料である。

「上野図書館紀要」第一冊中の

洪庵手簡解説正誤

- |      |           |          |
|------|-----------|----------|
| 一行目  | 上から三・四字目  | □細書は御細書  |
| 二行目  | 下から九・一〇字目 | □坐は草堂    |
| 四行目  | 下から二字目    | 松尾武は松尾屋  |
| 五行目  | 下から七・八字の間 | 申出候は申出申候 |
| 六行目  | 一〇字目      | 居申は不申    |
| 一行目  | 下から二字目    | 蛆虫は蛆虫    |
| 一七行目 | 下から三字目    | 御坐候は御座候  |
| 二〇行目 | 一七字目      | 来候様は来ル様  |
| 二三行目 | 九字目       | 雨は雨      |
| 二五行目 | 下から二字目    | 御坐候は御座候  |
| 二六行目 | 八字目       | 多候は多く    |
| 三〇行目 | 六字目       | 北野は北堂    |
| 三一行目 | 一字目のあとに   | かねとはかね候と |

おがた・とみお

東京大学名誉教授  
当館科学技術関係資料  
整備審議会委員長